



2014年1月15日発行（季刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2014年1月  
第 97 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久



## 目 次

漢点字の散歩（35）（岡田健嗣）	1
野間追い文庫という支援（攪上久子・山内 薫）	4
漢点字訳『萬葉集釋注』第二卷（岡田健嗣）	8
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	15
漢文のページ	19
ご報告とご案内	21
編集後記（木下和久）	23

## 漢点字の散歩（三十五）

岡田 健嗣



### 読書（付記）

（前略）岡田さんの「漢点字の散歩」は、「読書」というものに対して、あらためて多くのことを考えさせられる、貴重な一文となっています。／（中略）岡田さんのいわれる「読書のフィードバック」というようなプロセスが介在するような読書の機会はあまり多くないような気がします。岡田さんが求められる漢点字書は、まさにそのような読書に耐えうる内容の書物でなければならぬでしょう。（後略）

以上は本誌前号に、編集に当たって下さっておられます木下さんが、後記に記されたものからの抽出です。前号に拙稿を投稿するに当たって、読者の皆様の大方は、このように受け止めて下さるであろうことを、私なりに予想しておりました。

と申しますのは、例に挙げた読書は、確かに「読書」にふさわしい読書であって、書かれたものを取り

あえず読むという、一般に行われている読む行為とはかけ離れたもので、例として、果たしてこれが適当であったか、私も充分確信してのことではなかったからに他なりません。しかしながらものを「読む」という行為をどう理解するか、一般の「読む」という行為と、わが国の視覚障害者が「読む」と呼んでいる行為が、同様の行為と捉えられていることに、疑問を差し挟むことがあってもよいのではなからうか、そんなところから「読書」の例として挙げたのが、先の例でした。もし一般の「読む」という行為と、視覚障害者が「読む」と呼んでいる行為が同じ行為であるのなら、どうしてそう言えるのか、異なった行為と言われるならば、それぞれにどのような行為で、その結果として読書に求めるものに、どのような相違が招来するか、そんなところを考えてみたかった、従って先に挙げた例は、決して熟読玩味しなければ「読む」行為とは言えないという意味合いのものではなく、考えるプロセスの例として挙げたに過ぎず、あのような読書もあれば、流し読み、斜め読みという「読み」もあり得るので、しかし流し読みや斜め読みであっても、必要とあらば直ちに熟読のモードに切り替えられることを

含んだものが、一般の「読む」行為である、そう捉えたものでした。

一般の「読む」行為と、わが国の視覚障害者が「読む」と呼んでいる行為をどう捉えるかという問いには、既に私は結論を提出しております。それは、一般の「読書」あるいは「読む」という行為と、視覚障害者が現在行っている「読書」あるいは「読む」と呼んでいる行為とは、「読」という語が用いられているとは言えども、どうやら別の行為だ、というものです。

私の経験、私の実感がまずはそう言わせるのですが、荒いものではありませんが、その大枠は前号で述べてみました。

再考しますと「読む」とは、文字を対象とした行為であること、文字を読み、文章を読み、解読し、理解し、思考に反映させることを言います。そこから「心を読む」とか「空気を読む」とかの表現が現れはしますが、その基底には文字を読むことが厳然としてあって、まだそれは解消してはおりません。

それに対してわが国の視覚障害者が言っているところの「読む」とは、文字を対象としない行為を指していること、漢字仮名交じり文で表記されている文章

を、漢字仮名交じり文で表す触読文字を持たないために、カナ・分ち書きの触読文字を触知し、あるいは音訳された音訳書を聴読する――そこには文字は介しません――ことを、「読む」と呼んでいるのです。

このように私が、一般の「読む」とことと、視覚障害者が言う「読む」ことが別なものだという認識を得るようになったのは何時頃だったのか、これも既に述べておりますように、「読む」ということが如何に人間形成に大きなウェイトを占めているかを突きつけられてからで、それは盲学校から社会に出て間もないころでした。社会は、隅から隅まで文字の支配下にありました。文字を使いこなせなければ、文字に使われるだけ、使われるならまだよろしい、それに応えられなければ要らないと、ないものとして処遇されます。そのように扱われながら、その後ほぼ十年を過ごして、漢点字に出会うことになりましたが、この日本という地に生まれて約三十年を、漢字という文字を知らぬまま成長し、社会生活を余儀なくされたということは事実ですし、現在のわが国の視覚障害者は、如何にもパソコンで文字を書いていると胸を張っても、読んではないことに変わりありません。

漢字を知らないまま生きなければならぬ辛さから漢点字によって救われた私は、しかし大きな誤算を犯していました。他でもない、漢点字を習得しさえすればそれまでの私のような境遇は解消されます。多くの視覚障害者が漢点字を習得し、漢点字での読書を日常化すれば、漢点字書へのニーズが高まって、漢点字書の製作にも力が注がれるであろう、そう考えたのでした。その裏付けは、私の味わって来た漢字を知らない辛さで、わが国の視覚障害者は押し並べてその辛さを味わっているに違いないというものでした。これが大きな誤算だったのです。

二つの世界、などと言えば目くじらを立てる方もおられようとは思いますが、文字のある世界とない世界に生き、しかも現実には入り交じって同じ国家、同じ社会に属していると信じて生活しているこの現実、これをどう感じるかというのが、私の年来の課題だったということ、**「読書」**に仮託して申し上げたのが前号の拙稿でした。

そこでもう一つ問うてみましょう。

私もしばしば自らを振り返ってみて、如何にも視覚障害者だなあと感じる、あるいはそう思われる言動や行動を取ることがあります。それはあくまで、振り返

ってみてで、その現場では分かりません。それは社会人としてはやはり奇異なものに映るに違いなく、振り返ってみれば、赤面するようなことです。しかも社会からは、視覚障害者だから仕方ないと扱われることになりません。それは決して社会の「優しさ」などではありません。問題にされない、捨てて置かれるといった扱いです。

誰しにもそのようなことはあり得ましょう。しかし如何にも「視覚障害者らしい」と感じられる、言い換えれば視覚障害者の特徴とも言えるような言動・行動と感ずるものです。これが一体どういうものか、言葉で表現するにはまだ消化が不十分です。それを押して二、三言葉を挙げてみるなら、何か軽はずみな、底の浅い、未成熟な、筋の通らない、独り善がりな、行き当たりばつたりの、語彙が乏しいなどという形容詞を被せたくなるもので、当人（私もその一人）はそれに気付かずに過ごしてしまう、そんな性格のものに思われます。

私はその要因を、「読む」ことに求めました。前号で述べましたように、文字を相手にした「読む」という行為は、必要とあらば、どこまででも留まって深めることができます。それを実行するかどうかは、誠に

任意です。任意であるということは、自由という幅とそれに伴う責任という結果を生じます。自由と責任は常に対になってやって来て、それに沿った行為・言動を求めます。このように社会は常に任意の判断を求めて来ます。その判断を保障するのが「読む」という行為ではないか、そう思われてなりません。「読む」という行為を積み重ねることは、恐らく社会からの求めへの対処の、言わばリハーサルなのではないのか、視覚障害者はそのリハーサルを閉ざされているために、如何にも視覚障害者らしい言動・行動を取るようになってしまふ、というのが取りあえずの私の結論です。

漢点字はその「読む」という行為の可能性を、わが国の視覚障害者に開いてくれました。多くの視覚障害者が漢点字の触読によつて読書すれば、その方法も進化して行くはずです。そうすることで、ノーマライゼーションも進行するはずです。

しかしながら現状は、ほとんどの視覚障害者はそれに気付いていない、私の誤算はここにあつたようです。同じような苦しみを味わっているはずなのに、その解消を読書に求めようとしないう、この現状を本誌の読者諸兄弟のお心に留めていただきたい、そう願つて止みません。

## 野間追い文庫という支援

攪上 久子 (子どもたちへへあしたの本)

プロジェクト\* 臨床発達心理士)

山内 薫 (墨田区立あずま図書館)

### 野馬追文庫とは

野馬追文庫という支援は、心の痛みに子どもの本で寄り添ってきた、一元図書館員の発想が生み出しました。南相馬市、そこの人々の生活を見続けて、そこに今住んでいる子どもたちに、毎月震災が起きた日と同じ11日に子どもの本を届けているのが野馬追文庫です。野馬追いというのは、地域の伝統的なお祭り『相馬野馬追』からとつた名前です。

福島県南相馬市という地域、ここは地震と津波の被害と放射線被害を受けた三重苦の地域です。現在なお復興というにはあまりにもかけ離れた状況です。子どもの半数はこの町から転居しています。昨年9月に再開した南相馬市よつば保育所は、再開時戻った幼児数は5割、また市内のある小学校では、新入生30人のはずが、8人でした。一方で、半数の子どもたちはこの地で生活を続けています。家族がバラバラに暮らして

いることは、今はこの地では普通です。届ける本は、福島の現役の図書館員の力を貸りながら、地域の状況や季節などを考え、その月に送る本をリアルタイムで選んでいます。

### なぜこういう支援が必要だと考えたのか

震災後でもない時期から本を持って、当時まだ閉鎖された図書館や福祉施設で読み聞かせをしていた先の提案者のことばかり引用させていただきます。

「一度にはなく、継続した援助が見捨てられていない気持ちと勇気をくれます。途切れなく、例えば「こどものとも」や「かがくのとも」が毎月送られるように送っていただけるのが良いのではと思います。まず、限られたスペースなので上記の本と同等の優れた絵本が十冊程度欲しいです。少ない本を何回も何回もかわるがわる見る中で本が子どもや親の中で力を持つてくるといふ感じを私は持っています。たぶん最初に送られてくる本が二十冊だと多すぎる感じですか。何を読むか迷うというのでは多すぎるのだと思うのです。選書に力を入れてくれると助かります。その後一ヶ月に二〜三冊ずつ定期的に送っていただけると子どもたちや親たちが「今月くるのは何だろう」と楽しみが出

来ます。その生活の小さな楽しみが生きていく上で必要だと思うのです。南相馬市民の感情として「見捨てられた」「南相馬は見殺しにされた」という思いが強いです。ですから一時期に多量の本が送られることではなく、十冊ぐらいから初めて、月に一回何冊かそれが増えていくという喜びは、見捨てられていないという信頼や、生きていこうという希望につながり、優れた本の楽しさと相まって、子どもたちが本が大好きになるきっかけとなるのだと信じています。どうかセツトではなく、母と子への読み聞かせに適切な選書をお願いします。つまり選書にこもるメッセージが欲しいのです。」

### 経過

2011年3月11日以後、子どもや子どもの本に関わるものたちは、本の力を信じ、本によるたくさんの支援に動きまわりました。だが、こうした小規模な要請にえられる形態の支援は少なく、〈あしたの本〉プロジェクトの中に、個別のニードに応じていた〈だいじょうぶだよ〉パッケージという支援がありました。これは障害など特別なニードを持つ子どもたち楽しんでもらえる本を届けるプロジェクトでしたが、とりあえ

ず、ここを窓口に、支援を始めました。(その後2012年春から野馬追文庫として独立させました)2011年8月11日、はじめの10冊を、7月当時、開設されていた仮設住宅12箇所、その後すぐに開設予定の6箇所(計18箇所)の仮設住宅集会所に(つまり計180冊)お送りしました。その後は、2冊平均毎月11日に必ず届くように送っています。現在仮設住宅は、34箇所を増えています。

本は、先に述べたように、毎月そのときそのときメッセージを込められるものを選んでいきます。(決して一度に選ばないようにしています)いろいろな本が候補にあがってきましたが、思わず笑っちゃうような楽しいお話、住民にはお年寄りも多いため、その方たちも懐かしく知っているお話、語り継がれている力のある昔話、読み継がれてきたロングセラー本などを結果として今まで多く届けてきました。2012年11月から、輪の拡大と資金難の応援のために、この支援をよく理解してくださった高知こどもの図書館に利用者からの本の収集をたのみ、2冊のうち1冊をここの収集本から送っています。今後この輪は拡大していくつもりです。

本が人のつながりを作っていく

現地に届く本は、当初は提案者の元図書館の方が読み聞かせに回られていました。また、初めにこの支援をやりましょうと受け止めてくださり、震災直後から支援やボランティアの最前線に立っておられた原町保健センターの保健師大石さんや、その後窓口を引き継がれた南相馬社会福祉協議会の黒木さんはじめ生活相談員の皆様がサロンなどで活用くださってきました。今も仮設住宅に送る本は、34箇所に仕分けし、社協に送らせていただき、そこから、各集会所の本棚に分配いただいております。

本はその場で読むもよし、家に持っていつてもよし、自由に使っていたり、家に持つていってしまったり、自由にいつまでに返さなくてはならないという制限を作らないことは、原発の状態がまだ不安定で、仮設での生活も不安定だった南相馬の実情が必要としたことでした。実際には、各集会所でもとても大事に使っていたりしています。今後の方向として、地元の文庫活動をしている方たちのご協力や、仮設の住民の中でおはなし会が生まれることを願っています。

本を送りながら、南相馬市を見つめています、少しずつ市内の方たちとのつながりも生まれてきました。

市には、南相馬市立中央図書館という、素晴らしい図書館もあり、物的被害はなくとも、スタッフの避難で職員不足に苦しみながらも、「仮設住宅の方も、カードを作りにみえました。また、県外に避難している方が、一時帰宅の帰りに寄ってくれました。かなり疲れているようでしたが、図書館がよりどころになっていくことの重要性を痛感しています。南相馬の誇りをとりもどすために図書館が輝きを失わないよう、期待にこたえていこうと思います」（早川副館長）この地域で根を張って子どもたちに本の楽しさ素晴らしさを届ける活動をしていらしたちゅうりつぶ文庫の梶田さんは、怯えて泣く子を毎晩だいて絵本を読んであげたお母さんのお話をしてくださりながら、「より一層今だからこそ本力を感じています。」宮沢賢治が好きという農民出身の桜井市長は、「神から選ばれたと思うって、南相馬から世界に羽ばたく子どもを育てたい。」と、自治体の首長としてのポジティブな決意を話して下さいました。

## 今後への思い

被災地の子どものために、子どもを日々支える大人を支えることが重要だと痛感しています。南相馬に限らずに、被災地の大人たちの苦しさ必死さを、支援

という名のもとにその思いに土足で踏み込まない配慮、支援者が主人公になってしまふことのない支援をすることの重要さと、そのことを貫くことの難しさも痛感しています。

殺風景な集会所に、本が並んでいるのを見たとき、自身がほっとしたことを覚えていきます。支援はまず日常を取り戻すことが大事といわれますが、日本人にとって本がある部屋というのはそれだけで日常であると感じました。そしてその本の存在が、人と人とのつながりを少しずつ紡いでいってくれています。ひとりひとりの抱えている事情や苦しさは、南相馬の中でも個別の様々です。本には、その「個」に向けられるあたたかなまなざしが必ずあるとおもっています。日本の再生を、野馬追文庫という窓と鏡を通し共に希求していきたいと思っています。

\*子どもたちへあしたの本プロジェクト

(社) 日本国際児童図書評議会 (JBBY)

(社) 日本ペンクラブ

(財) 日本出版クラブ

(財) 出版文化産業振興財団 (JPIC)

が呼びかけ団体となり、原画展・イベント開催・図書館バス・にじのライブラリーの運営などのプロジェクトを展開中

## 漢点字訳『萬葉集釋注』第二卷

岡田 健嗣

本会では昨年度に引き続き、『萬葉集釋注』の第二卷を、横浜市中央図書館へ納入すべく、漢点字訳書の製作の作業が進められております。

『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）は全一〇卷、それぞれに万葉集卷第一・第二、第三・第四；第十九・第二十が収められており、今回の第二卷は、卷第三と第四が収められた卷です。

前卷のご紹介でも申し上げましたように、同書の編集は、歌番号に沿って歌が掲げられて、その歌あるいは歌群に、「釈文」として、伊藤先生の解説が付されています。先生によれば、万葉集の歌は、一首一首が独立しているわけではなく、何らかの関係をもちつつ配列されていて、そこには一つの物語とも言うべき流れがあると言われます。また卷々によって、それぞれの編集に、特徴があるようです。

ここにその中から、幾つかの歌をご紹介します。全て短歌です。ご紹介は、漢点字版の編集に沿って、漢字仮名交じり文、読み仮名、そして伊藤先生の現代語

訳の順に掲げます。

### 一 卷第三

卷第三の部立ては、「雑歌」「譬喩歌」「挽歌」となっています。ここにご紹介するのは、「雑歌」に収められている大伴旅人（おおとものたびと）の歌の一群、「酒を讀むる歌十三首」と題されているものです。

旅人は、持統・文武帝の白鳳時代から天平にかけて生きた官人で、大伴氏の統領として活躍しました。しかし時代は大伴氏には厳しく、藤原氏の擡頭が顕著になるに従って、徐々に地位を失って行きます。旅人は中納言まで昇りながらも、既に老境の歳を迎える身で、太宰帥（だざいのそち）として筑紫の太宰府への赴任を余儀なくされます。

この卷では、旅人の赴任と都への帰還、そして旅人の死までの様子が描かれています。妻の大伴郎女（おおとものいらつめ）は、赴任先の太宰府で歿し、同地に葬られました。この卷に収められる歌々は、そのような境遇の旅人の心情を偲ばせるのに余りあります。また旅人をめぐる人々との交流の跡を偲ばせる歌々は、私たちが何か儚い思いに沈めます。

左の歌（この巻の旅人と旅人をめぐる人々の歌も）は、ある酒宴で交わされた歌と言われます。おもしろくもあり、また悲しくもあり、胸に迫る歌々です。なお伊藤先生は、三三九と三四〇の歌を一連なりと捉えておられます。従ってその現代語訳は、三四〇の歌の後ろに置きました。

三三八

験なき ものを思はずは 一坏の 濁れる酒を 飲むべくあるらし

しるしなき ものをおもはずは ひとつきの にごれるさけを のむべくあるらし

（この人生、くよくよ甲斐のない物思いなどに耽るより、一杯の濁り酒でも飲む方がましであるらしい。）

三三九

酒の名を 聖と負せし いにしへの 大き聖の 言の宜しさ

さけのなを ひじりとおほせし いにしへの おほきひじりの ことのよろしさ

三四〇

いにしへの 七の賢しき 人たちも 欲りせしものは 酒にしあるらし

いにしへの ななのさかしき ひとたちも ほりせしものは さけにしあるらし

（酒の名を聖人と名付けたいにしえの大聖人の言葉、その言葉のなんと結構なこと。いにしえの竹林の七賢人たちさえも、欲しくて欲しくてならなかったのはこの酒であつたらしい。）

三四一

賢しみと 物言ふよりは 酒飲みて 酔ひ泣きするまさりたるらし

さかしみと ものいふよりは さけのみて 多ひなきするし まさりたるらし

（分別ありげに小賢しい口をきくよりは、酒を飲んで酔い泣きでもしている方がずっとまさっているらしい。）

三四二

言はむすべ 為むすべ知らず 極まりて 貴きものは 酒にしあるらし

いはむすべ せむすべしらず きはまりて たふと

きものは さけにしあるらし  
〈なんとも言いようも、しようもないほどに、この上もなく貴い物は酒であるらしい。〉

三四三

なかなか 人とあらずは 酒壺に なりにてしかも 酒に染みなむ

なかなか ひととあらずは さかつほに なりにてしかも さけにしみなむ

〈なまじつか分別くさい人間として生きているよりも、いつそ酒壺になつてしまいたい。そうしたらいつも酒浸りになつていられよう。〉

三四四

あな醜 賢しらをすと 酒飲まぬ 人をよく見ば 猿にかも似む

あなみにく さかしらをすと さけのまぬ ひとをよくみば さるにかもにむ

〈ああみつともない。分別くさいことばかりして酒を飲まない人の顔をつくづく見たら、小賢しい猿に似ているのではなからうか。〉

三四五

価なき 宝といふとも 一坏の 濁れる酒に あに

まさめやも

あたひなき たからといふとも ひとつきの にごれるさけに あにまさめやも

〈たとえ値のつけようがないほど貴い宝珠でも、一杯の濁り酒にどうしてまさらうか。とてもまさりはしない。〉

三四六

夜光る 玉といふとも 酒飲みて 心を遣るに あにかめやも

よるひかる たまといふとも さけのみて ころをやるに あにしかめやも

〈たとえ夜光る貴い玉でも、酒を飲んで憂さ晴らしをするのにどうして及ぼうか、及ぶはずがない。〉

三四七

世間の 遊びの道に 楽しきは 酔ひ泣きするにあるべかるらし

よのなかの あそびのみにち たのしきは 多ひなきするに あるべかるらし

〈この世の中のいろいろの遊びの中で一番楽しいことは、一も二もなく酔い泣きすることにあるようだ。〉

三四八

この世にし 楽しくあらば 来む世には 虫に鳥にも 我れはなりなむ

このよにし たのしくあらば こむよには むしにとりにも われはなりなむ

（この世で楽しく酒を飲んで暮らせるなら、来世には虫にでも鳥にでも私はなつてしまおう。）

三四九

生ける者 遂にも死ぬる ものになれば この世にある間は 楽しくをあらな

いけるひと つひにもしぬる ものになれば このよにあるまは たのしくをあらな

（生ある者はいずれは死ぬものであるのだから、せめてこの世にいる間は楽しく過ごしたいものだ。）

三五〇

黙居りて 賢しらするは 酒飲みて 酔ひ泣きするに なほ及かずけり

もだをりて さかしらするは さけのみて ゑひなきするに なほしかずけり

（黙りこくって分別くさく振る舞うのは、酒を飲んで酔い泣きするのに、やっぱり及びはしないのだ。）

二 巻第四

巻第四の部立ては「相聞歌」です。

この巻のヒロインは何と言つても大伴坂上郎女（おとおものさかのうえのいらつめ）です。郎女は、旅人の妹、大伴家持（おとおものやかもち）には叔母に当たります。郎女は旅人の没後大伴氏の家刀自（主婦）として、家中を切り盛りしました。

郎女には坂上大嬢（さかのうえのおおいらつめ）と、坂上二嬢（さかのうえのおといらつめ）の二人の娘がいました。姉の大嬢を甥である家持に娶せ、思惑通り婚約にまで漕ぎ着けましたが、悲しいかな大嬢はまだ一〇歳、余りに幼かった。家持は年上の女性に心を引かれて、大嬢との関係は絶えたかに見えました。ところが家持の相手の女性は、数年の後には病を得て、亡くなってしまいます。家持は、遺児である娘とともに残されます。

郎女は、娘の大嬢をもう一度家持に思い出させようと、一策を労します。そこで送ったのが、左の七首の歌と言われます。

この七首の歌の跡に、大嬢と家持の相聞が続きます。

(大伴坂上郎女)

六八三

言ふ言の 恐き国ぞ \* 紅の 色にな出でそ 思  
ひ死ぬとも

いふことの かしこきくにぞ くれなあの いろに  
ないでそ おもひしぬとも

〈他人の噂のこわい国がらす。だから思う気持を  
顔色に出してはいけません、あなた。たとえ思い死に  
をすることがあつても。〉

六八四

今は我は 死なむよ我が背 生けりとも 我れに依  
るべしと 言ふといはなくに

いまはあは しなむよわがせ いけりとも われに  
よるべしと いふといはなくに

〈そうはいつでも私はもう死んでしましますよ、あ  
なた。生きていても、あなたが私に心を寄せてくれる  
だろうとは、誰も言ってくれそうもないから。〉

六八五

人言を 繁みか君が 二鞆の 家を隔てて 恋ひつ  
ついまさむ

ひとごとを しげみかきみが ふたさやの いへを

へだてて こひついまさむ

〈人の噂がうるさいためでしょうか、二鞆ふたさや  
の刀のように間ま近くにある家なのに、あなたが隔た  
つたままで下さりもせず、私を恋しがっていらつ  
しやるというのは。〉

六八六

このころは 千年や行きも 過ぎぬると 我れかし  
か思ふ 見まく欲りかも

このころは ちとせやゆきも すぎぬると あれか  
しかおもふ みまくほりかも

〈この頃では逢わずに千年も経った気がするが、私  
が勝手にそう思うだけなのか、それとも逢いたくてな  
らぬのでそんな気がするのだろうか。〉

六八七

うるはしと 我が思ふ心 早川の 塞きに塞くとも  
なほや崩えなむ

うるはしと あがおもふこころ はやかはの せき  
にせくとも なほやくえなむ

〈すばらしいお方と私が思う心、この心は、早川の  
ように、いくら堰せきとめようとしても、やっぱり崩  
れてほとばしり出てしまうことだろう。〉

六八八

青山を 横ぎる雲の いちしろく 我れと笑まして  
人に知らゆな

あをやまを よこぎるくもの いちしろく われと  
ゑまして ひとにしらゆな

〈青山を横切つてたなびく白雲のように、私にだけ  
はつきりほほえまれて、しかもそれと人に知られない  
ようにして下さいね。〉

六八九

海山も 隔たらなくに 何しかも 目言をだにも

ここだ乏しき

うみやまも へだたらなくに なにしかも めごと  
をだにも ここだともしき

〈海や山を隔てるというそんな遠くにいるわけでは  
ない、目と鼻の先にいるのに、何で目くばせ一つする  
機会さえこんなにも少ないのであろうか。〉

(大嬢)

七二九

玉ならば 手にも巻かむを うつせみの 世の人な  
れば 手に巻きかたし

たまならば てにもまかむを うつせみの よのひ  
となれば てにまきかたし

〈あなたが玉だったら手に巻きつけもしように、こ  
の世の人なので手に巻くこともできません。〉

七三〇

逢はむ夜は いつもあらむを 何すとか その宵逢  
ひて 言の繁きも

あはむよは いつもあらむを なにすとか そのよ  
ひあひて ことのしげきも

〈お逢いできる夜はいつでもあったでしょうに、何  
でまたとくに人目に立つあんな夜にお逢いして、うる  
さい噂の種になつてしまつたのでしょうか。〉

七三一

我が名はも 千名の五百名に 立ちぬとも 君が名  
立たば 惜しみこそ泣け

わがなはも ちなほいなに たちぬとも きみが  
なたたば をしみこそなけ

〈私の浮名はどんなにひどく立っても我慢できます  
が、でもあなたの浮名が立ったらそれがぐやしくて泣  
かずにはおれません。〉

(家持)

七三二

今しはし 名の惜しけくも 我れはなし 妹により  
ては 千度立つとも

いましはし なのをしけくも われはなし いもに  
よりては ちたびたつとも

へやつとお逢いできた今はもう、名を惜しむ気持な  
ど私にはさらさらありません。あなたのせいなら千度  
も浮名が立ったとしても。へ

七三三

うつせみの 世やも二行く 何すとか 妹に逢はず  
て 我がひとり寝む

うつせみの よやもふたゆく なにすとか いもに  
あはずて あがひとりねむ

へこの現し世がもう一度繰り返されるなんていうこ  
とがあるうか。このかけがえのない夜を、あなたに逢  
わぬまま、どうして一人寝ることなどできようか。へ

七三四

我が思ひ かくてあらずは 玉にもが まことも妹  
が 手に巻かれなむ

あがおもひ かくてあらずは たまにもが まこと  
もいもが てにまかれなむ

へこんなに苦しい思いをせずに、いっそ玉でありたい。  
い。そして、仰せのとおり、あなたの手に巻かれてい  
よう。へ

(大嬢)

七三五

春日山 霞たなびき 心ぐく 照れる月夜に ひと  
りかも寝む

かすがやま かすみたなびき こころぐく てれる  
つくよに ひとりかもねむ

へ春日山に霞がたなびいて、うっとうしく月が照つ  
ている今宵、私はただ一人夜を過ごすことになるので  
あろうか。へ

(家持)

七三六

月夜には 門に出で立ち 夕占問ひ 足占をぞせし  
行かまくを欲り

つくよには かどにいでたち ゆふけとひ あしう  
らをぞせし ゆかまくをほり

へあなたがいわれるその月夜の晩には、門の外に出  
で立って夕方の辻占つじうらをしたり、足占あしうら  
をしたりしたのですよ。あなたの所へ行きたいと思つ  
て。へ

「東京漢点字羽化の会」第95～97回

例会報告とわたくしごと

木村 多恵子



10月の例会(第95回)2013年10月9日(水)  
13:30～15:30、場所、港区ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

9月の例会のときに、講習会用漢点字テキストの墨字版を作ってくださいだったことについて、岡田さんから改めてお礼を述べた。

「補助漢点字」の墨字版を何冊かまとめて購入することにしました。

『岩波古語辞典』の「あ行」を漢点字読者が読みやすいように、岡田さんが2ファイルにまとめたことを岡田さんが報告した。

「朝日「備える歴史学」』のグループ編成を決めた。

『万葉釋注』の校正についての説明に、横浜羽化の方がいらして、丁寧の説明された。

岡田健嗣著「講習会用漢点字テキスト初級編第6巻」の点字と墨字を学習者にお配りした。

11月の例会(第96回)2013年11月13日(水)

13:30～15:30 ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

「萬葉集釋注」の校正の進捗状況を確認した。

2014年1月の例会と講習会の日程を決めた。

今月もIさんが点字印刷に横浜へ行ってください。

Iさん、何時もありがとうございます。この点字印刷のことはIさんに任せきついでるので、Iさんがどうしても都合が悪くなったとき、点字印刷をできなくなつては困るので、是非他の会員の方も、Iさんがお出でになるときに何方も一緒に行つて操作を覚えておいていただきたいと願っている。皆様よろしくお願ひいたします。

横浜での羽化の新年会、2014年1月19日に東京からの参加をお願いした。

「備える歴史学」のグループの組み合わせをした。

「古語辞典」について、その他の質問に岡田さんは丁寧の説明した。

12月の例会(第97回、会発足9年目に入る)

2013年12月11日(水)13:30～15:30

場所、港区ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

「東京漢点字羽化の会」発足9年目に入った。会員

の皆様根気のいるお仕事をしてくださいましてありがとうございます。これからも、とくにご健康にご留意いただきますして、長くよろしくお願いいたします。

日本漢点字協会から発行された「補助漢字」を東京漢点字羽化の会でも5冊購入した。そして、補助漢字について岡田さんが説明した。

横浜で行われる「羽化の会」の新年会参加をお勧めし、3人が参加してくださることになった。

「備える歴史学」入力担当者の組み合わせを決めた。

「古語辞典」のこと、それに伴う入力方法についての質問に岡田さんが答えた。

#### \* 予告

2014年1月の例会(第98回)

1月8日(水) 13:30~15:30

ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

2014年1月の学習会(第74回)

1月11日(土) 18:30~20:30

ヒューマンプラザ第2会議室

2014年2月の例会(第99回)

2月19日(水) 13:30~15:30

ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

2014年2月の学習会(第75回)

2月22日(土) 18:30~20:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

#### わたくしごと

ある方とお話をしていたときのことである。

「白鳥の歌を知っていますか？」と聞かれた。戸惑いながらも考えた。シューベルトの歌曲集の「白鳥の歌」のことを言っておられるのだろうか？もちろん正宗白鳥のことではない。「見にくいあひるの子」でもない。チャイコフスキーのバレエ組曲「白鳥の湖」であるうか？サンサーンスの「動物の謝肉祭」の中の「白鳥」はどうだろう？いったいなんのことを言っておられるのかわからない。けれどもわたしの頭の中ではなにかが騒いでいる。白鳥、白鳥、白鳥。白鳥の歌。昔この言葉に心が捉われた記憶がもやもやと胸の中に浮かび上がってきた。が、今はそのことにこだわってはいられない。「分かりません。なんでしようか？」とお聞きした。

「白鳥の歌とは、人が死ぬ前に作った最期の作歌、または曲・演奏などをいうのです。一般には芸術家

が作り出した生前最期の作品をいうのですから、  
〈白鳥の歌〉は、陶芸や木工、染色、日本刺繍などあ  
らゆる分野の人たちにも当てはまると思います。

もつと広く言えば、専門家でなくても、ごく普通の  
人にも白鳥の歌を作れるとわたしは思っています。で  
すから、多恵子さんには多恵子さんの白鳥の歌があつ  
て当然だと思えます」

と、その方はおっしゃった。まさか！と、わたしは  
とんでもないことだと照れてしまった。ただ、このよ  
うに広い視野に立って、ひとりひとりのことを大切に  
見つめるその方の暖かさを感じ取ることができた。

「白鳥は死に瀕したとき、一声高く美しい声をあげ  
るといふ神話があつて、そこから転じて芸術家が最後  
に残した作品をいうのです。」

この会話の後、わたしは一人で自分の心の引き出し  
のあちこちを探した。〈白鳥の歌〉は何時、何処でわ  
たしと巡り会い、絡みついて、そして潜り込んでしま  
ったのだろう。思い出せない歯がゆさ、じれったさを  
抱えたまま、高校時代に読んだドストエフスキーの  
『カラマーゾフの兄弟』（米川正夫訳 岩波文庫 1  
928年10月15日第1刷り、1957年4月5日改訳

17刷り、1995年7月14日57刷り）を久しぶりに再  
読した。

こんなに年をとつても、理解できないところが沢山  
あるのに、高校生のわたしはずいぶん背伸びをしてい  
たのだなと思ひながら読んだ。

裁判所の場面である。カラマーゾフ家の4兄弟の長  
男、ドミートリー・カラマーゾフが父親殺しの下手人  
であることを論ずる、検事イツポリットの演説を際立  
たせるための解説が出てきたところで、わたしは「あ  
つ」と小さく叫んだ。「これ、これ、ここだつた  
わ！」

（以下、『カラマーゾフの兄弟』米川正夫訳、6  
検事イツポリットの論告・性格論 より引用）

彼（イツポリット検事）は、この論告を自分の（シ  
エフデューブル）（傑作）と心得ていた。自分の一生  
涯を通じてのシエフデューブル、すなわち〈白鳥の  
歌〉と考えていたのである。実際彼は9か月後、悪性  
の肺病に罹つて死んでしまった。だから、もし彼が自  
分の最期を予感していたとすれば、彼は実際自分で自  
分を、臨終の歌を歌う白鳥にたとえる権利を立派にも  
つていたのかも知れない。彼はこの論告に全身を注

ぎ、あらん限りの知識を傾けた。…」（引用終わり）

〈白鳥の歌〉についての説明はこれだけであった。

この裁判所においての、あらゆる角度から論を立ててドミートリー・カラマーゾフが下手人であることを、多くのひとに納得させ、感動を与える熱弁は確かに傑作であった。が、わたしにはその言い分を全面的には納得できなかった。けれども、これは読者に楽しみを残すドストエフスキーの手腕にちがいない。それにしてもなぜこの論告が「イツポリットの〈白鳥の歌〉」であるというのか、その引喩の意味を当時のわたしは理解できなかった。

かなり長い間この言葉を温めていたが、その謎を解く鍵を見つけることができなかった。今のように、最寄りの図書館へ行って教えていただくことはできなかったし、図書館はわたしにとって遠い存在であった。学校の教師や先輩に教えていただけそうな人は見あたらなかった。我が家には広辞苑や故事ことわざ辞典などなかった。なんとという知的貧困だっただろう。

シューベルトの歌曲集「白鳥の歌」は、シューベルトの遺作の歌曲を彼の友人が集めて、一つの歌曲集にまとめたもので、白鳥が死ぬときに美しい高い声をあげるといふ伝説にちなんでこの題を着けたのだとい

う。したがって、シューベルトの他の歌曲集「冬の旅」のような一貫した物語性は無い。

きちんと整理されてはいないまでも、わたしはこの言葉の破片を引き出しの片隅にしまっておいた。そして、この50年の間に、この言葉の周辺を巡り歩いて、少しづつ謎が解けてきていたのは確かである。そうして2013年の夏になって、やっと氷塊したのは遅きに失したけれどもうれしいことである。

最後にもうひとつ付け加えさせていたきたい。

〈白鳥の歌〉のドイツ語は“Schwanengesang”（シュバーネン・ゲザング）だという。正しい発音は当然わたしには表記できないけれど、こういうことを、図書館員や知人に教えていただけることの幸せをつくづく感謝している。

\* 訂正とお詫び、羽化93号の木村の「東京羽化例会報告とわたくしごと」の、〈わたくしごと〉の文中、座布団の正面は、縫い目のあるところの反対の位置のように記したが、正しくは、縫い目があるところが正面である。

大変失礼をいたしました。

2013年12月26日（木）

# 漢文のペリシ

三 国 志 の 名 文

## 出 師 表 (三)

先 漢 親 賢 臣 遠 小 人 此  
 以 所 以 興 隆 也 親  
 小 人 遠 賢 臣 此 後 漢  
 所 以 傾 頽 也 先 帝 在  
 時 每 与 臣 論 此 事 未  
 嘗 不 歎 息 痛 恨 於 桓  
 靈 也 侍 中 尚 書 長 史  
 參 軍 此 悉 貞 亮 死 節  
 之 臣 也 願 陛 下 親 之  
 信 之 則 漢 室 之 隆  
 可 計 日 而 待 也

参照図書『渡辺精一（祥伝社新書）  
『朗読してみた中国古典の名文』

賢臣に親しみ、小人を遠ざくるは、此れ先漢の興隆せし所以（ゆえん）なり。小人に親しみ、賢臣を遠ざくるは、此れ後漢の傾頽（けいたい）せし所以なり。先帝在（いま）しし時、毎（つね）に臣と此の事を論じ、未だ嘗て桓・靈に歎息痛恨せずんばあらざりき。侍中・尚書・長史・参軍は、此れ悉く貞亮（ていりょう）にして、節に死するの臣なり。願わくは陛下これに親しみ、これを信ぜば、則ち漢室の隆（さか）んならんこと、日を計（かぞ）えて待つ可し。

\* \* \* \*

前漢の興隆や後漢の滅亡の例をひき、「賢臣に親しみ小人を遠ざける」ようにと、官職名をあげて信頼すべき家臣達を具体的に示す。

先漢（前漢）Ⅱ前二〇一

後八年

後漢Ⅱ二五〇～二二〇年

魏への遠征開始と「出師の表」上奏Ⅱ二二七年



先帝・劉備  
161～223年



親 シミ 賢 臣 ニ 、 遠 ザクルハ  
 小 人 ヲ 、 此 レ 先 漢 ノ 所 以 ナリ  
 興 隆 セシ 也 。 親 シミ 小 人 ニ 、  
 遠 ザクルハ 賢 臣 ヲ 、 此 レ 後 漢  
 ノ 所 以 ナリ 傾 頹 セシ 也 。 先 帝  
 在 シシ 時 、 毎 ニ 与 臣 論 ジ 此  
 ノ 事 ヲ 、 ザリキ 未 ダ 嘗 テ  
 不 シ バアラ 歎 - 息 - 痛 - 恨 セ 於  
 桓 ・ 靈 ニ 也 。 侍 中 ・ 尚 書 ・ 長  
 史 ・ 参 軍 ハ 、 此 レ 悉 ク 貞 亮 ニシ  
 テ 、 死 スル 節 ニ 之 臣 也 。 願 ハクハ  
 陛 下 親 シミ 之 ニ 信 ゼ バ 之  
 ヲ 、 則 チ 漢 室 之 隆 シナランコト 、 可  
 シ 計 ヘテ 日 ヲ 而 待 ツ 也 。



### 魏の曹操

155～220年 18  
 後漢の丞相。 魏王。 三国  
 時代の魏の  
 基礎を作った。



### 呉の孫権

2～252年  
 の初代皇帝。

## 「報告と」案内

### 一 『萬葉集釋注』の漢点字訳



『萬葉集釋注』第二卷、漢点字版、八分冊、補注その他一冊。

本文にもご紹介しましたように、横浜漢点字羽化の会では、昨年度に引き続き今年度も、『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）第二卷の漢点字訳を進めて参りました。この二月には、横浜市中央図書館に納入できる見込みです。

本書は「万葉集」の巻第三・巻第四が収められています。構成は前巻と同様、歌、あるいは巻群が置かれて、その後ろに「釈文」として、伊藤先生の解説が収められております。

漢点字版では、文庫版には収められておりません万葉仮名の「原文」も、ハードカバーの原書から抽出して収録致しました。

このようにして、誠に遅々とした歩みではございますが、視覚障害者にも「万葉集」を読む機会が開かれることとなりましたことを、ご報告申し上げます。こ

のこの実現に至りましたのは、本会員各位の弛まぬご努力の賜に他なりません。感謝も過ぎることはありません。

このプロジェクトはまだまだ継続致します。「万葉集」が全巻、触読文字で読むことができるようになること、取りあえずの目標は、この一点でございます。

相変わりませぬご支援のほど、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

なお前年度完成分であります『萬葉集釋注』第一卷、その他本会製作の漢点字書は、パソコンとピンディスプレイで読む、電子ブックであるEIBファイルでご提供しております。ご希望の方は、お申し出下さい。

以下、本書活字書の奥付よりご紹介申し上げます。

集英社文庫　ヘリテージシリーズ

萬葉集釋注（まんようしゅうしやくちゅう）二

2005年9月21日　第1刷

2011年10月10日　第2刷

著者　伊藤（いとう）　博（はく）

編集　株式会社　綜合社

発行者 加藤 潤  
発行所 株式会社 集英社  
印刷 大日本印刷株式会社  
製本 大日本印刷株式会社

## 二 『岩波古語辞典』の漢点字訳

前号でもご紹介しましたように、東京漢点字羽化の会では現在、『岩波古語辞典 補訂版』（大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編、岩波書店）の漢点字訳を進めております。昨年九月、「ア行」がまとまり、完成致しました。本会では本書は、全てEIBファイルでのご提供とさせていただきます。今回完成致しました『ア行』は、「ア、イ」と「ウ、エ、オ」の二つのEIBファイルの形でご提供致します。ご希望の方は、お申し出下さい。

『岩波古語辞典』の漢点字訳の進捗状況は、現在全体の四分の一辺りまで進んでおります。これも会員各位のご努力に負うもので、完成すれば、これまでのボランティア活動では為し得なかったことを達成することになります。

会員の皆様、よろしくお願い申し上げます。

## 三 『常用字解』の音訳

既にご報告申し上げておりますように、現在『常用字解』の音訳を進めております。

二〇一一年六月末に音訳者の皆様にお集まりいただき、活動を開始致しました。この年明けで、二年と六カ月を過ぎました。

この間の音訳者の皆様のご努力は、誠に目覚ましいものがございます。未踏峰を目指すような気構えが感じられます。私（岡田）も、圧倒されぬよう、取り組んで参る所存でございます。

現在はまだ完成の時期を云々できる状態ではございませんが、音訳者の皆様には、『常用字解』の構成から、一つのリズムを掴んでいただけるところまで到達できたものと感じております。このプロジェクトも、これまでにはなかった活動です。一つの完成品を作り出すことばかりでなく、視覚障害者のまだ意識し得ない潜在的なニーズの掘り起こしに繋がるような何か、そんなものが残せればと、夢想しております。読者諸兄姉の、変わらませぬご支援をお願い申し上げます。

## 編集後記

▼「一点字から識字までの距離」は、ずっと連載が続いていますが、今回は執筆者の都合でお休みとし、別の記事を掲載しました▼本会では東京漢点字羽化の会と共同で、新年会を1月19日(日)に桜木町駅近くのブリーズベイホテルで開催しました。参加者の中には、実際に漢点字を使用している、あるいは使用できるように学習している視覚障害者の方もおられます▼当日も新年会の前にその学習会が開かれました。漢点字の学習というのは、基本的にテキストに沿った独習で、2カ月に1回開かれる学習会に直接出席していた

だいて、講師の岡田さんからテキストに盛り込まきれない説明を含んだお話や、学習者が疑問に思った点について説明を受けたりします。そういうお話は、漢字そのものについての生い立ちや意味などの説明が多くなります。学習者には、手で触って漢字の形が分かるように、補助者がレーズライターで大きな漢字を書いて、漢字の形を理解してもらいます。私もその補助者の役を果たしながら、岡田さんの漢字に対する知識と理解の大きさに驚かされながら受講者と一緒に漢字の学習を楽しんでいます。

木下 和久

## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada\_tr\_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は4月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。